

Aさんが教えてくれたこと

Aさんは慢性呼吸器疾患で在宅酸素療法を実施し、定期的に当院を通院している。今回、同居している孫家族が新型コロナウイルス感染症に感染し、Aさんも入院前日から発熱、咳嗽を発症し、近医で新型コロナウイルス感染症と診断された。自宅療養していたが、呼吸困難感が増強し当院へ救急搬送され、肺炎は合併していなかったが重症化のリスクがあるため入院となった。

私は夜勤をしておりAさんの入院受け入れを行った。努力呼吸はなかったがAさんの表情はうつむき、目を閉じていることも多かった。Aさんは「感染しないよう気をつけていたけど、家族からじゃ仕方ないよね」とおっしゃった。また、バイタル測定していると値を気にされながら、「酸素 1.5L なら家と同じ量だね。(SP02) 97%ならそんなに悪い値じゃない。よかった。でもなんとなく苦しい感じが消えない。普段はこんなじゃない」と話された。慢性呼吸器疾患を患って、日頃から重症化のリスクが自分にはあることを肝に銘じて生活していたと思われた。家族からの感染に、怒りや苛立ちを感じているようには見えなかった。ただ、Aさん自身、感染したという事実、普段と違う息苦しさが、最悪の事態をも想像させ、不安となっているだろうと思った。「早速治療を始めていきますからね、息苦しい感じが落ち着くまでは無理をせず、私たちに頼ってください。遠慮なく呼んでください」と説明し、内服介助や点滴を行い、尿瓶をベッドサイドに置くなどの環境整備を実施した。

Aさんは体にフィットしたボタンシャツを着て、胴回りがきつそうでファスナーを下げてズボンをはいていた。私は、窮屈そうだなと感じ、「着替えますか」と尋ねた。「家では四六時中、甚平を着ている。締め付けは辛いからお願いしたい」との返事だった。病衣に着替えようとするやうとすると労作で容易に喘鳴が出現した。

一瞬、着替えなんて提案しないほうが良かったかな、とも思ったが、Aさんに、無理に動かず力はいれなくて良いことを説明し、患者の呼吸状態をみながら慎重に着替えを実施した。呼吸状態は悪化なく、すぐに喘鳴も消えたが、一時的でも患者の息苦しさを増強させたため負担がかかったことを謝ると、「大丈夫、ありがとう」との返事だった。夜勤中は患者の状態に急変はなく、日勤に引き継いだ。

数日後、入院時と比較しAさんの症状は改善していた。「だいぶ動けるようになりましたね。入院の時より顔色もいいですね」と伝え、「入院の時はお世話になったね。入院の時は苦しい感じがあったけど心配でしようがなかったけど、ずいぶんよくなったよ」とAさんは明るく答えてくれた。やはり不安が強かったんだな、と改めて思った。入院時、もしかすると今後は悪化する可能性もあると思っていたため、私は回復傾向にあるAさんを見て非常に安心した。その後も順調に回復し隔離解除の日を迎えた。

退院前日、Aさんの退院指導をおこなっていると、明後日に地区の役員会があるが参加していいか、ワクチンは次いつ打ったらいいか、などの質問があり、退院後の生活を見据えていることが感じられ



て嬉しかった。指導を終えて退室しようとするやうと、「〇〇さん、もう少し時間ある？見せたいものがあるの」と呼び止められた。「これ僕の趣味で、庭先で育ててるんだよ」と言って、スマートフォンの写真を見せてくれた。オレンジ色の小ぶりで可憐な洋ランが幾重にも咲いていた。聞けば洋ランもいろんな種類があり、温室がなくても育てられるそうで、Aさんの話しぶりからは趣味が日常生活の一部になっていると感じた。また、洋ランを育てることの熱心さから、Aさんの性格までも垣間みれたようだった。Aさんが丹精込めて育てたランの花が私の脳裏に焼き付いた。

何だろう、この満たされた感覚は久しぶりだ、と我に返り、じわっと熱いものが私の中にこみあげてきた。Aさんにとっては話し相手も少ない入院生活の中で、誰かとしゃべりたかっただけかもしれない、退院前に自分の趣味の話をしたかっただけかもしれない。しかし私の中では、懐かしい中にも



新鮮で、看護の楽しさってこういうところにあった、と思い出させてくれるものであった。入院時は、患者の細かな情報がない中で、身体的、精神的にも不安定な患者のケアをするのは緊張感が伴う。入院時にかかわった患者の安否は気になり、回復していく過程は嬉しいことだ。ましてや、入院前の患者像がイメージできたり、深い話をしていけるということは看護師冥利に尽きると感じた。

当時は新型コロナウイルス感染症患者の急増で入退院が激しく、ADL の低下している患者のケアで業務はひっ迫していた。感染拡大予防の観点から制約があり、不自由なことも感じていた。物理的な患者との距離間は心の距離をも形成し、縮まることはない気がしていた。霧がかっていた私の心は、A さんとのかかわりを通して、患者さんと日々を実直に向き合っていくことで、心を許して話ができる関係性を築くことができる、看護師としての喜びも感じる事ができると気づかされた。私の視界を清明に晴らしてくれた A さん、ありがとうございました。

